

唐十郎と阿佐ヶ谷（下）^{*}

V Doc 式場の「代行」の思想

身に覚えのない他人の記憶を押し付けられたことについて、やはり「僕」は既存のテキストを援用しながら意味づけをおこなう。

彼が三日間アパートに閉じ籠って眺めるのが、つげ義春の短編漫画「沼」である。

狩りをしていた少年が沼のほとりで出会った少女に誘われるまま、彼女の家に泊まり、一夜を明かすという展開の作品である。そこで少女は鳥かごに一匹の蛇を飼っている。なにもしなければ人間の首をしめたりしないだろうと言う少年にたいして、少女は、「するよ」「夢うつつなれど、蛇にしまられるといっそ死んでしまいたいほどいい気持ちや」と意味深なセリフをはく。深更になり、少年は隣で寝息をたてている少女の首を、思わずしめてしまう。

つげ作品のこの場面について「僕」は、次のように解釈する。

そこですでに少女の予言した「するよ」は的中したのである。

ただ、それは沼に触れただけであって、沼を所有したことになるのではない。そればかりか少女の沼に触れた彼は、本当に彼であつたろうか。首に手を廻した彼の指は、蛇の代行をしたまでのことである。つまり、少女の沼をよぎるイリュージョンの秩

序に従ったまでのことだ。〔…〕

ひたとも動かぬ沼は、まるで触れられたこともないような顔をしてそこに横たわっている。それでいながら、少女の吐いた一言、あの「するよ」が呪文のように聞こえる。

だが、そんな誘いは常に代行を演じさせるだけのことだ。

（傍点引用者）

こうして「少女Ⅱ沼」に触れる蛇の役割を少年が「代行」させられているという解釈が提示され、それがそのまま「僕」の置かれている状況にかさねられる。もちろん「僕」は、そこから逃れたいと願っており、そのためにフィルムの逆廻しのように、漫画を最後から一コマ一コマ遡って読んでいって、最初の場面にかえることで、《描かれなかったもう一つの道をたどることができるかもしれない》と考える。つげ義春作品の主人公に乗り移ることで、自分の役割を変更しようという試みである。

銃を肩に飄々と、沼の誘いを振り切って、狩人らしく遠出するのだ。

さて、それには小道具が一つ必要である。狩人らしくみせるための銃が——それを肩に病院前の沼に立ち、味良加さんの恋

小^{**}林 実

八一「刊」にある「楫を絶えたよりなぎさの蜃小舟焦がれわびぬといかで知らせん」があるが、典拠関係については検討中。

二 渥美清太郎『邦楽舞踊辞典』（富山房、一九三九）ほか。

三 下関の平家官女説話については、渡辺憲司「下関の遊廓―稲荷町を中心に」（『下関市史―民俗編』所収、下関市市史編修委員会、一九九二）、日本歴史地名大系三六『山口県の地名』（平凡社、一九八〇）による。

三 本稿中の『平家物語』引用は、『新編日本古典文学全集四五・四六 平家物語一・二』（小学館、一九九四）による。

四 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九）。

五 「長唄詞章における和歌の引用」（『芸能文化史』第八号、一九八七）、「邦楽詞章における和歌引用部分の実相」（『芸能文化史』、第一六号、一九九八）、「邦楽詞章名詞索引」（長唄・清元・常磐津）（若草書房、一九九六）。

六 長唄「ことぶき」（嘉永六年三月成立、初代杵屋六翁作曲）は、「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」の上の句を置き唄に、下の句を段切にする。長唄「時雨西行」（元治元年（一八六四）九月成立、二代目杵屋勝三郎作曲、河竹黙阿弥作詞）は謡曲「江口」に材を得た作品で、詞

章中に「世の中を 厭ふまでこそ難からめ 飯の宿りを惜しむ君かな」と口ずさみて行き過ぐるを なうなう暫し と呼び留め 世を厭ふ 人とし聞けば飯の宿に 心留むなと思ふばかりに それ厭はずばこなたへと……」と、西行と遊女の問答歌二首をそのまま採っている。

七 小塩さとみ「長唄」、小島美子監修『日本の伝統芸能講座 音楽』（淡交社、二〇〇八）。

八 文化八年（一八一二）三月中村座初演「遅桜手爾葉七字」の一つ、九代目杵屋六左衛門作曲。

九 引用は『新編日本古典文学全集五八 謡曲集 一』（小学館、一九九七）による。

二〇 上方舞の吉村流には地唄「八島」を平家官女的心で舞う振りがあるが、吉村流は明治初期に創始された流派であるため、この演出は地唄「八島」成立時のものではなく、後世の解釈によるものと考えられる。この演出には、長唄「官女」の存在が少なからず影響しているものと考えている。

A Study of Nagauta “Kanjo” — Fusion of Prose and Verse in the Lyrics of Nagauta

*Tomoko Hosoya 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)

キーワード 長唄 官女 平家物語 謡曲 八島

おわりに

長唄「官女」の詞章について、官女を主人公に据えた散文的性格と、和歌的修辭を多用した韻文的性格を中心に考察した。先行する文学作品を多く引用しながらも、本曲の構成は実に巧みに組まれたものであり、決して「切り張り」の一言に付されるものではない。

無論、本稿で検討した散文と韻文の融合は、長唄詞章のみに指摘できる特徴ではない。日本の古典文学においては、確立したひとつのスタイルとも言える。だが、他の文学ジャンルと同様のスタイルが指摘できることは、長唄詞章が単なる美句の羅列ではなく、先行文学と同様、文学研究の対象として扱われるべき文芸であることを示すものである。

なお、本曲詞章が持つ文芸作品としての魅力は、音になったときに最も発揮される。官女の「あだ媚き」たる様子は、柔らかな女房詞が人の声で唄われたときにより鮮明になるし、同音反復・掛詞のおもしろさも音で味わうにしくはない。「枕に寒き几帳の風も」の後には三味線で几帳を揺らす風の音が再現され、浜唄の伴奏には、官女の心情とは対照的に明るくのかな旋律が加えられる。三味線が単なる伴奏に止まらず、唄の内容を音で表現することで詞章の世界を重層的にするのが長唄の特徴だが、本稿では詞章の検討に留まり、十分に論及しえなかった。いずれ稿を改めて論じることとしたい。

注

- 一 吉川英史氏は『邦楽鑑賞入門』（創元社、一九五九）において邦楽分類表を提示し、「長唄は「歌いもの」と「語りもの」との中間に位し、両方の性質を持ったものである」と指摘している。

- 二 鹿倉秀典「近世歌謡詞章と戯作」（『江戸文学』二〇号、一九九九）。

- 三 （注二）と同。

- 四 『日本舞踊全集 二』（日本舞踊社、一九七七）「官女」の演目解説による。なお、本曲初演時の扮装については論の分かれるところである。稀音家義丸氏は正本表紙に描かれる扮装から「これ（論者注・長袴）ですと始めの二上りのところはそんなに早く踊れなかったではないかと思えます」と述べている（「長唄聞書」

[<http://www.kine-je.com/kikigaki/kikigaki18.htm>])。一方『日本舞踊全集』は、「安宅の「弁慶」から引抜いたものですから、そういう衣裳（論者注・長袴）を下に着込んでいることは無理です」としている。

- 五 丸茂美恵子「日本舞踊における娘形技法の実証的研究」（学位請求論文、二〇〇一）。

- 六 池田弘一「長唄びいき」（青蛙房、二〇〇二）。

- 七 高野辰之編『日本歌謡集成』巻九「近世編」（改訂版、東京堂出版部、一九六〇）により、一部記号を省略するなど表記に改訂を施した。なお現在は一一般的に「このなこのな」を「このなこのな」とする。

- 八 中内蝶二・田村西男『長唄全集（上・下）』（日本音曲全集、日本音曲全集刊行会、一九二七）、浅川玉兎『長唄名曲要説（正・続・補遺）』（日本音楽社・邦楽社、一九七七）ほか。

- 九 歌舞伎舞踊の冒頭で、人物の登場や物語の展開に先立ってプロローグ的に唄われる前置き部分の唄のこと。

- 一〇 —2については、小沢蘆庵歌集『六帖詠草』（文化八年（一

い浮気者を待つ女の心情だが、同時に自らの境遇を恨みながら一人夜を明かし暮らす官女のさまに重なる。挿入部分は「いとど恋には身をやつす」までで、次の「憂やつらや」は、官女の心情と読むのが妥当であろう。この「憂やつらや」と、続く「波の哀れや壇の浦」は長唄独自の詞句である。わずかに二句ではあるが、官女の心情を述べることで唄の世界を浜の情景から官女の日常に引き戻し、「壇の浦」という地名を明示することで次の謡曲「八島」の詞章への転換を図っている点で、この二句の持つ意味は小さくない。

——4部分は、前述の通り謡曲「八島」の詞章に拠ったものである。世阿弥作による謡曲「八島」は、源平の武将が死後修羅道に堕ちた苦しみを語る修羅物（二番目物）のひとつ。平家が本拠地としていた屋島を、源義経が奇襲して大勝利を収めた屋島合戦の模様を中心とする。能の修羅物には戦に敗れた平家の武将の悲哀を描くものが多いが、この「八島」は、源義経の勇敢な戦いぶりや躍動感あふれる合戦の様子を描く勝修羅である。あらずじは以下の通り。

（あらずじ）屋島を訪れた旅の僧は、塩焼き小屋の主から昔の源平合戦の様子を聞く。主は、源義経の堂々たる大将ぶり、壮烈な戦さの模様、鍛引のエピソードなどを詳しく語る。主があまりに詳しいので、不思議に思った僧が名を尋ねると、主は自分の正体が義経であることをほのめかして姿を消す。暁近く、僧の夢に義経の霊が現れ、生前の怒りや恨みが執念となり、西海に漂っているのだと打ち明ける。義経の霊は、屋島合戦の最中の弓流しのエピソードや、修羅道に堕ちてなお続く平教経との戦いを語るが、やがて春の夜が明けると、義経の霊は消え失せ、浦の松に朝風が吹くばかりであった。

音曲における謡曲「八島」詞章の摂取は、長唄独自のものではない

く、先行する作品に地唄「八島」がある。地唄「八島」は、次に掲げる謡曲「八島」詞章（九）の前に、〈序〉と呼ばれる詞章数行を加えたものである。

今日の修羅の敵は誰ぞ、なに能登の守教経とや、あらものものしや手並は知りぬ、思ひぞ出づる壇の浦の、その舟戦今ははや、その舟戦今ははや、闇浮に帰る生死の、海山一同に振動して、舟よりは関の声、陸には波の桶、月に白むは剣の光、潮に光るは兜の星の影、水や空、空行くもまた雲の波の、打ち合ひ刺し違ふる、舟戦の駆け引き、浮き沈むとせしほどに、春の夜の波より明けて、敵と見えしは群れゐる鷗、関の声と聞えしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり高松の、朝嵐とぞなりにける一読して分かるように、地唄「八島」が引用するのは謡曲「八島」のキリの詞章の全てで、謡曲のラストシーンを切り取ったダイジェスト版と言うべき作品である。一方、長唄「官女」が引用するのが部である。引用の中心は源平の修羅たちの合戦の様ではなく、合戦の幻影を消し去る夜明けである。源義経をシテとする勝修羅物の詞章に描かれる夜明けを、敗者である平家の、しかも合戦後に残された官女の心象風景にあてはめるという視点の転換がなされている（100）。

——3・浜唄の「恨み勝ちなる床の内」から——4「春の夜の波より明けて」へと連なる詞章は、その大部分が他作品詞章によるものでありながら、官女が一人過す夜から朝への時間的な展開を含み、夢に壇の浦の合戦を見た官女が夜明けの浦で現実引き戻されるという、一貫したドラマを仕組むのである。

に、官女を象徴する持ち道具である「檜扇」や、続く詞章で引用する「磯馴れ小唄」を巧みに登場させているのである。

これまでの長唄詞章研究では、和歌との関係は主に引用・典拠関係について述べられるのみであった。本曲が引用する和歌二首については先に述べた通りである。長唄詞章と和歌の関係については、長崎由利子氏に、長唄一三五曲における和歌引用の実相を調査・分類した「長唄詞章における和歌の引用」、さらに同論文を発展させる形で清元・常磐津を含む邦楽六五〇曲について調査・分類を試みた「邦楽詞章における和歌引用部分の実相」の論考がある。大変な労作である。長崎氏には他にも『邦楽詞章名詞索引（長唄・清元・常磐津）』^(二五)という編著があるが、邦楽全体の詞章を俯瞰する長崎氏の視点は、近世邦楽詞章の研究において大変意義深いものであり、今後の近世邦楽詞章の礎になるものと言えよう。ただ、典拠調査結果の分類や考察については、検討の余地を残すものである。例えば、長崎氏は和歌引用の方法について、「曲の冒頭に和歌を引用する形」「詞章と詞章の間に和歌をはさみこむ形」の二種類、または「一首全体を引用」「一首の一部を引用」「一首以上を部分的に合成して引用」の三種類にそれぞれ分類している。しかし長唄における和歌引用の方法の実際は、一首を長唄の冒頭（置唄）と末尾（段切）に分けて配置するもの、二首の間答歌をそのまま採用するものなど、多岐に渡る^(二六)。和歌引用の効果についても同様であって、各曲ごとの検討を抜きにして全体的な意味づけをすることは難しい。更に言えば、ここまで考察してきたように、長唄詞章と和歌の関係は単なる引用の典拠関係にとどまらない。長唄の詞章はその叙述方法において、歌語の持つイメージや和歌の修辞法に多大な影響を受けている。和歌のみならず、近世邦楽詞章と先行する文学作品の関係に

ついては、全体を俯瞰する姿勢とともに、各曲の詞章について精査し、その細部を明らかにすることも不可欠であろう。筆者にとつて、今後の課題である。

四・浜唄・謡曲引用の態度

さて、官女の心情を述べてきた詞章は、二上り↓三下りの三味線の調子替えを経て、――3の「磯馴れ小唄の一節」へと展開する。磯馴れ小唄は浜唄とも呼ばれるもので、漁師や磯仕事に従事する人が浜辺で唄った俗謡を指す。先に触れた通り――3部分については類歌・典拠は未詳であるが、本曲における挿入歌としての性格を考えると、巷間に流布していた俗謡を採ったと考えるのが妥当なように思う。詞章中に俗謡や流行歌を取り入れる長唄の作歌方法は、変化舞踊の特徴として既に指摘されていることである^(二七)。同じ変化舞踊の一つである「越後獅子」^(二八)を例に挙げれば、同中の浜唄については、類歌が『音曲神戸節』『潮来風』などの俗謡集に散見する。唄は対の型になっている。前半が浮気な男の心情、後半がその男性に愛想を尽かす女の心情を唄った恋の唄である。「船の帆綱をかけぬ」は、男が妻（恋人）の元に落ち着かず、友と連れだつて遊び歩く様を例えたものであろう。「夜半の水鶏を砧と聞いて」は、夜更けに戻った男が家の戸を叩く音を、女が無視して「砧の音だと思つた」とうそぶくのである。水鶏の鳴声が戸を叩く音に似ていることから、「夜半の水鶏」は夜更け過ぎの待ち人の訪れを暗示する表現である。『平家物語』や平家官女説話とは無関係の、のどかな恋の唄が挿入されることで、泣きながら夜を明かす官女の孤独が対照的に強調される。また、浜唄中の「恨み勝ちな床の内」は、家に帰らな

ここで注目すべきは「室と八島」という語順である。『平家物語』に登場する「室」と「八島」を並べて列挙したのは、〈室の八島〉という、全く別の歌枕を意識したものと考えられる。〈室の八島〉は、『歌ことば歌枕大辞典』^(二四)によれば以下のようなものである(傍線は筆者による)。

室の八島 下野国の歌枕。『袋草紙』雑談に、下野国守となつた源経兼が、国府を訪れた使者に室の八島を指さして教えたという話があるので、今の栃木市惣社町にあったという国府の近辺だと想像される。『奥の細道』に「室の八嶋に詣す」とあるのも、この惣社に今もある大神神社のことである。『和歌初学抄』に「煙絶エズ立ツ」とあるように、きまつて煙とともに詠まれるが、それは野中の清水から水蒸気の立つさまが煙のように見えるのだと、源俊賴は説明する(内大臣家歌合 元永元年十月二日・四九判詞)。また、同じ歌合での藤原基俊の判詞や『色葉和難集』は、室の八島とは竈のことだとする説を紹介する。しかし、『古今六帖』に「しもつけや室の八島に立つ煙思ひありとも今こそは知れ」(第三・一九一〇)とあり、この歌を踏まえたかと思われる、藤原実方の「いかでかは思ひありとも知らずべき室の八島のけぶりならでは」(詞花集・恋上・一八八)も、下野国の歌枕と認識してのものだろう。これらが、室の八島詠としては最も早いもので、いずれも恋の思いをよそえる歌だが、先の俊賴には、「煙かと室の八島を見しほどにやがても空の霞みぬるかな」(千載集・春上・七)のような、叙景的に詠んだものもある。(後略)

本曲詞章は、「室」と「八島」という地名を並べることで〈室の八島〉という別の歌枕を表現し、〈室の八島〉と〈煙〉〈恋〉との連関

性を、八島での塩焼きの煙と官女の恋心を描くことに利用している。つまり、「室と八島で鹽焼く煙」という表現は、1.『平家物語』に登場する「室」「八島」という地名から官女の背景にある物語を、2. 煙・恋を連想させる〈室の八島〉という歌枕から塩焼きの情景と官女の心情を、3. 「八島」での塩焼きの情景から謡曲「八島」を、それぞれ示唆しているのである。

本曲に登場する地名を概観すると、唄の前半、官女の様子や心情を描写する部分では、序詞(「下の下関」「生田の森の幾度か」・歌枕(「室と八島で鹽焼く煙」・掛詞(「恥しく 顔も赤間が関」「泣いて明石の蟹の袖」)など、何らかの和歌的修辞を利用して表現されている。掛詞という和歌的修辞を用いて平家ゆかりの地を挙げ、また平家に関連のある地名を用いて別の歌枕を表す。本曲は、歌語としてのイメージと『平家物語』の舞台の地としてのイメージを複層的に利用しているのである。

地名の表出に限らず、本曲詞章が用いる和歌的修辞は実に複雑である。逆の言い方をすれば、和歌的修辞が読み解けなければ、本曲の詞章を読解することは難しい。

——B「何時檜扇を松の葉の 磯馴れ小唄の一節に」を例に挙げてみよう。「檜扇を」は「檜扇」の「ひあふ」に「日逢ふ」を、「松の葉の」は「松の葉」と「待つ」を、「磯馴れ」は「松の葉の磯馴れ」と「磯馴れ小唄」をそれぞれ掛けた表現である。「松の葉の磯馴れ」とは、強い潮風のために松の葉など樹木が地面になびいて生え伸びることだが、比喩的に海岸のそばに長く住み慣れることも指す。本曲では官女の境遇も暗示するものだろう。つまり、「いつの日か逢うのを待つ間に、松の葉が潮風になびくように、私も零落した磯暮らしになれてしまった」という官女の身上を述べる文脈の中

で阿波に渡ったのち陸路で高松に至り、民家に火を付けて八島奇襲を成功させた。

長唄「官女」は、『平家物語』の筋を追うものではない。下関における平家女官の説話自体が『平家物語』においてはほとんど触れられておらず、したがって本曲詞章に登場するこれらの地名も、『平家物語』の話筋と直接的に関連して表れているわけではない。表現上はあくまでも掛詞として官女の身上を述べる文脈に添えられたり、俗謡や謡曲からの引用詞章の一部として表出するに過ぎない。だが、これらの地名が詞章に登場することは、聴く者（時に薄物正本を読む者）に対してある一定の効果をもたらす。すなわち、平家が都を追われて壇の浦で滅亡するまでの舞台となった地名を、唄のあちらこちらに詠み込むことで、聴いている人に唄の背景となる『平家物語』のイメージを想起させているのである。

変化舞踊の一つである本曲は、通し狂言のように、一つの世界観の中で踊られるものではない。本曲で言えば、前の弁慶という全く異なる役柄から、衣装の引き抜きで一瞬のうちに世界が変化し、観客の前には突如別の姿の役者が登場することになる。さらに、七つ、九つと役柄が変わる変化舞踊では、一曲が一〇〜一五分と短く、長々と時間をかけて役柄の設定を理解させることはできない。本曲詞章に詠み込まれた平家ゆかりの地名は、このような状況において、観客が役柄を理解するための助けとして十分な役割を果たしたものである。

三、和歌的表現の多用

前項で述べた地名のうちのいくつかには、『平家物語』の世界を想

起させるという効果の他に、もう一つの役割がある。序詞として唄のリズムを整えたり、歌枕として地名が持つイメージによって官女の様子や心情を効果的に表現したりする、歌語としての役割である。

生田の森は、先に述べたように一ノ谷合戦に関わる地ではあるが、生田の森という語がすなわち平家の物語を想起させるものではない。むしろ「たち帰り生田の森の幾度も見るともあかじ布引の滝」（『栄華物語』）のように、「幾度」を導く同音反復の序詞として用いられることが定型化している語であり、本曲においては、歌語としての役割に比重を置かれて用いられているものである。明石・須磨についても同様で、先に引用した『平家物語』巻五「月見」に「或は源氏の大將の昔の跡をしのびつつ」とあるとおり、『源氏物語』「須磨」「明石」以降、貴種流離の地、静かでもの寂しい浦のイメージが定着した土地である。本曲詞章において明石は「泣いて（夜を）明かし」との掛詞で表現されている。明石という地が持つ貴種流離のイメージは、下関の浦にわび住まいする官女の様と通じ、さらに波に濡れがちな「蟹（海人）の袖」という歌語とともに、恋の涙に濡れる官女の様子を想起させるのである。

本曲における和歌的修辭については、さらに——A「其方思へば室と八島で鹽焼く煙」という表現に注目したい。

「室」「八島」がそれぞれ『平家物語』に登場する平家ゆかりの地名であることは、前述の通りである。「鹽（塩）焼く」は製塩のために浜辺で海草を焼くことで、ひどく煙が立つことから、胸を焦がす恋の象徴としてしばしば和歌に詠まれる。また屋島（八島）では古くから製塩業が行われており、後述する謡曲「八島」でも塩屋（塩焼き小屋）を物語の舞台としており、「八島で鹽焼く煙」は、謡曲の影響を受けた表現と考えて差し支えなからう。

注ぐ御裳川は、安徳天皇を抱いて海へ身を投げた二位尼の句「今ぞ知るみもすそ川の御ながれ波の下にもみやこありとは」（長門本『平家物語』）から名付けられた川。この川で洗濯をすると、他の人の衣類は汚れが落ちないが、遊女の衣類は少しも残らず汚れが落ちたという^(三〇)。本曲詞章は、こういった平家女官のその後に関する説話を元に成立している。

冒頭の置唄は、先述の『古今和歌集』所収の和歌を元歌にして、平家全盛の頃を都で過ごした官女の追憶を表現する。「都はいづか故郷に」という変化は、時間的な推移だけでなく、栄華からの零落という状況の変化、京と下関の実質的な距離など、複層的な意味を持つものである。「馴れし手業」とは生計のために営む魚の行商であり、続く「此所の在所はナ」以下、魚売りの様子や孤独に耐える心情が官女の視点で語られる。宮中に暮らした身の上による「内裏風俗あだ媚き」たる様子は、詞中の「たもいなう」「おまな」といった女房詞で表現される。魚売りの身にそぐわない優美な言葉は、往時とは対照的に零落した官女の現況を強調するとともに、「桜姫東文章」の風鈴お姫に通底する、ある種の倒錯した色香を感じさせる。この色香と「蓮葉なものぢやえ」という自嘲的表現があいまって、先に紹介した官女の遊女としての側面を暗に示唆する。

さて、ここで詞章に列挙される地名に注目したい（前掲詞章中太字）。本曲詞章中には九つの地名が挙げられており、すべてが『平家物語』に登場し、平家と何らかのゆかりを持って語られる地である。やや煩瑣になるが、各地名と平家の事跡との関わりを整理すると次のようになる。

下関・赤間が関・壇の浦 下関の旧名が赤間が関。壇の浦は、関門海峡の最も狭くなるあたりで、源平最後の合戦で知られる。平家滅

亡の地であり、平家ゆかりの史跡が数多く残る。

室 播磨国（現兵庫県）の地名で、室の泊・室津とも。歌枕のひとつ。天然の入り江と山に囲まれた地形のために古くから良港として栄え、瀬戸内航路の重要港であった。『平家物語』では、瀬戸合戦（巻十「藤戸」）において、都からやってきた源氏が最初に到着した場所。

八島（屋島） 都落ちした平家は一時九州に渡るが、やがて九州も追われ、その後屋島合戦で攻め落とされるまでの一年半、この屋島を本拠地とした。元暦二年（一一八三）の屋島合戦の舞台であり、義経の弓流し、那須与一の扇の的など、多くの逸話が生まれた場所である。

生田（の森） 摂津国（現兵庫県）の歌枕。生田神社の鎮座地及びその周辺を生田の森と称した。源平の一ノ谷合戦で、生田の森において激しい戦いが繰り広げられた。

明石・須磨 播磨灘に臨む海岸部一体の地名。風光明媚な景勝地、月の名所として多数の和歌に詠まれている。『平家物語』巻五「月見」においても、「福原の新都にまします人々、名所の月をみると、或は源氏の大將の昔の跡をしのびつつ、須磨より明石の浦づたひ、^(三一)と、秋の月見の情景として描かれる。また、明石・須磨ともに源平合戦の舞台になった地でもあり、平家敗走のさまの描写にも「いくさやぶれにければ、（中略）或は須磨より明石の浦づたひ、」（巻九「落足」）と同様の表現がある。巻十一「内侍所都入」では、壇の浦で生け捕りにされた女官たちが都へ護送される途上、明石で月を眺め、栄華をしのぶ和歌を詠む。

高松 現在の香川県高松市よりも東側の、「古高松」と呼ばれる辺り。八島のちょうど南側にあたる。平家追討に赴いた源義経軍は船

八島で鹽焼く煙 立ちし浮名も厭ひはせいで 朝な夕なに胸く
 ゆらする 楫を絶えてやふつとりと たより渚に捨小舟 へ心
 づくしの明暮に 乱れしまゝの黒髪も 取上げていふかねごと
 の 生田の森の幾度か 思ひ過ごして 恥しく 顔も赤間が関
 せかれては 枕に寒き几帳の風も 今は苦漏る月影に へ泣い
 て 明石の蟹の袖 へ何時檜扇を松の葉の 磯馴れ小唄の一節に
 三下りへ友のぞめきにそゝのかされて 船の帆綱をかけぬが無
 理か 須磨よ須磨よ いとど恋には身をやつす へ夜半の水鶏
 を砧と聞いて 立てし金戸を明けぬが無理か 須磨よ須磨よ
 恨み勝ちなる床の内 憂やつらや
 へ波の哀れや壇の浦 打合ひ刺違ふ船軍の懸引 浮き沈むと
 せし程に 春の夜の波より明けて 敵と見えしは群れ居る鷗
 関の声と聞えしは 浦風なりけり高松の 朝嵐とぞなり
 にける

以上の詞章が典拠とする先行文学作品については、古くから指摘がある。(八)置唄(九)に相当する——1「見渡せば柳桜に錦する都」は和歌「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」(『古今和歌集』五六番歌)、——2「楫を絶えてやふつとりとたより渚に捨小舟」は和歌「楫を絶え由良の湊による舟のたよりも知らぬ沖つしかぜ」(『新古今和歌集』一〇七三番歌)が元歌として指摘されている。(一〇)——3は詞章中の言葉で言う「磯馴れ小唄の一節」にあたるもので、本曲の中では挿入歌的性格を持つ部分である。本曲全体の詞章とは内容上関連のない唄であり、当時流行していた俗謡をそのまま引用したものと考えられるが、未だ類歌・典拠は不明である。唄の結びにあたる——4は、謡曲「八島」の詞章で、本曲の他

に地唄「八島」にも同様の箇所が引用されており、本曲は地唄を直接の典拠とすると考える向きが強い(一一)。

本稿は先行研究に指摘される典拠を踏まえつつ、本曲詞章における先行文学作品の摂取態度、その構成のねらいについて考察を加えるものである。

二・平家女官説話と平家ゆかりの地名

長唄「官女」の主題は、壇の浦の合戦後、下関に残された平家の官女のさまを描くことである。本曲詞章を読解する前提として、まずは下関に伝わる平家女官説話について理解しておかなければならない。

寿永二年(一一八三)、幼い安徳天皇を擁して都落ちした平家一門は、西海を舞台とした数々の戦いを経て、元暦二年(寿永四年・一一八五)、長門国赤間関・壇の浦の合戦で滅亡に至った。平家終焉の地となった下関市には、平家の武将や女官にまつわる史跡や伝説が数多く残されている。壇の浦の合戦後、入水に遅れ、下関に残された平家の女官たちは、魚売りや花売りをしつつ、遊女として身売って生計を立てたという言い伝えがある。遊女に渡す遊興費のことを「花代」というのはこの花売りを語源にすると伝えられ、遊女の濫觴譚のひとつとしても知られる話である。下関にある赤間神宮は、壇の浦の合戦において、敗れた平家一門とともに入水した安徳天皇を祀る。赤間神宮で毎年五月に行われる先帝祭では、現在も豪華絢爛な太夫の衣装を着た女性による「上臈道中」が行われる。これは、入水した安徳幼帝をとむらうために、上臈(遊女)に身を落した平家の官女達が参拝したことに始まる。下関市内を流れ、関門海峡に

る。先行詞章の切り張り（切り貼り）と言えば、和歌・俗謡・謡曲の詞章を多用した本曲「官女」の詞章は、まさにその典型である。しかし、本曲における先行作品の摂取態度は、ただ単に既存の語句を「切り張り」するに留まらない。複数の引用句は、語の持つイメージを最大限に生かすため、明確な意図に基づいて並べられており、その合間を独自の言葉でつなぐことで、新たな一曲を作り出しているのである。

本曲「官女」の詞章について検討することは、近世歌謡の詞章が「先行の歌謡に精通して詞章を織り成し、そこに当代の新しい趣向を入れていく」^(三)ものであったという鹿倉氏の指摘を再確認することであり、それは同時に、長唄詞章の持つ高い文芸性を明らかにすることにもなるはずである。

一、「官女」詞章と概要 先行研究

長唄「官女」は『日本音楽大事典』（平凡社、一九八九）に稀音家義丸氏によって次のように紹介されている。

官女 長唄変化舞踊曲。本名題「八島落官女の業」^{やしまおかんじょなりわい}。一八三〇年（天保一）三月中村座で、二世中村芝翫初演。九変化「第二番目九変化」の一つ。作詞は狂言作者が勝俣蔵、松本幸二なのでいづれかと思われるが、正本には杵屋三郎助述とある。作曲は杵屋三郎助（一〇代杵屋六左衛門）。（後略）

長唄には舞踊のために作られた曲と、純粹な鑑賞曲として舞踊の形式に縛られずに作られた曲（素唄）とがあり、本曲は前者にあたる。本名題に「八島落」とあることから分かる通り、題材は零落した平家の官女である。正本表紙には長袴を履き、頭上に盤台を乗

せた女性が描かれるが、現行の舞踊では海女のつくりで登場し、途中で白衣に緋袴の官女のつくりになるのが一般的である^(四)。初演時には九変化舞踊の二番目で、「葉越月安宅古例」の弁慶から引き抜きで本曲の海女姿になったものと考えられており、この構成について丸茂美恵子氏は、文化八年（一八一）に中村座で初演された七変化舞踊「遅桜手爾葉七字」の影響を指摘している^(五)。

作詞者については勝俣蔵・松本幸二の他に、古くから松井幸三の名が挙げられるが、いまだ確定には至っていない。池田弘一氏は論考中で松本幸二・松井幸三の可能性を比較検討の上、「消極的ながら」松本幸二説を採っている^(六)。

また丸茂氏は前掲論文中で、本曲成立の背景として、文化・文政年間に江戸で盛んになった雛飾りの影響を指摘している。すなわち、官女を題材とする曲の成立には、一般に雛壇に三人官女が飾られるようになったことがあるというものである。官女を題材とする長唄は、池田氏の前掲論文中に本曲を含めて八曲が紹介されている。その全てが一七五〇年以降の成立であり、丸茂氏の指摘と合致する。

本曲の詞章は次の通り^(七)。なお、傍線・太字は本論作成のため筆者が施した。

「見渡せば柳桜に錦する 都は何時か故郷に 馴れし手業の可愛らし

二上りへ此所の在所はナ このなこのな この浜越えて あの浜越えて ずつとの下の下の関 内裏風俗あだ媚きて 小鯛買はんか鯛買やれ 鯛買はんや鯛や鯛 コレ買うてたもいなうア、しよんがいな 如何にみすぎぢやよすぎぢやとてもおまな売る身は蓮葉なものぢやえ 徒歩跣足 其方思へば 室と